

無量塔蔵六 ヴァイオリンを語る

七條めぐみ 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科（音楽学領域博士後期課程）

平成 25 年 2 月 16 日（土）、愛知県立芸術大学サテライトキャンパスにて、音楽学コースの特別講座が一般公開で行われた。今回お招きしたのは、ヴァイオリン製作家の無量塔蔵六（むらたぞうろく）氏。1927 年生まれの無量塔氏は、1962 年に西ドイツ（当時）のミッテンワルド・国立ヴァイオリン製作専門学校に日本人として初めて留学し、翌年にマイスターの資格を得た人物である。帰国後は東京ヴァイオリン製作学校を設立し、今日までに多くのヴァイオリン製作家を育成してきてだけでなく、さまざまな国際コンペの審査員も務めた。今回の講座では、無量塔氏が訪れたヴァイオリン製作ゆかりのまちについて、スライドや実際の楽器を用いながらお話しいただいた。また、無量塔氏が製作・修繕した歴史的な弦楽器の数々が展示され、来場した人々の注目を集めていた。



レクチャーをする無量塔蔵六氏（中央）

講座の内容

1. ヴァイオリンのルーツ

無量塔氏はまず、現代のヴァイオリンはどのような楽器を祖先とするのか、その歴史的な起源についての話から始めた。今日、私たちが思い浮かべるヴァイオリンの典型的なイメージ——中央がくびれた独特の流線型、肩と顎の間にはさみ、弓を用いて演奏するスタイル——というのは、19世紀になってから定着したものと言われる。それ以前は、ヴァイオリンの演奏スタイルは現在とかなり異なっており、弓や棹（弦を押さえるための細長い部分）の形状も地域や用途によってさまざまであった。しかし、そのような細かな違いはあれど、ヴァイオリンとその仲間の楽器（ヴァイオリン族）に共通しているのは、4本の弦が5度間隔で調律されていることだ。無量塔氏によると、ヴァイオリンの大原則ともいえるこの特徴をもつ最古の楽器は、1581年のヴェンチュラ・リナローロによるものだという。

一方、ヴァイオリンの祖先の楽器としてしばしば名前が挙げられるのが、ヴィオラ・ダ・ガンバという楽器である。ヴィオラ・ダ・ガンバは形や演奏の方法がヴァイオリンと似ており、ヴァイオリンが誕生する前のルネサンスや初期バロック時代によく用いられていたためにこう思われている。しかし、ガンバは4度や3度の音程で調弦され、棹には弦を押さえる位置を示すフレットがついているように、実際はヴァイオリンと大きく異なる楽器である。それでは、ヴァイオリンの祖先とは一体どのような楽器なのだろうか——。この問いに対して、無量塔氏はリラ・ダ・ブラッチョという楽器を挙げた。この楽器は演奏するための弦を4本と、共鳴させるための弦を1本もつ。そして、ヴァイオリンの祖先だと言える最も大きな理由は、5度間隔で調弦されていることだ。つまり、無量塔氏によると、初めて5度で調弦されたリラ・ダ・ブラッチョが、のちのヴァイオリン族の原点だろうということだ。

2. ヴァイオリン製作のふるさと

つづいて無量塔氏は、ヴァイオリンが誕生した16世紀から現在に至るまでの、楽器製作にゆかりのあるヨーロッパの数々の街を紹介した。ヴァイオリンをイタリアやフランスに広めたと言われる人物、ティーフェンブルッカーのふ

るさとしてあるフュッセン。チェコとドイツの国境付近にあるシェーンバッハやマルクノイキルヒェン。弓づくりの街として有名なフランスのミレクール。そして現在もヴァイオリン製作の拠点として知られるイタリアのサロ、ブレシア、クレモナ。近世から現代までの、ヨーロッパ各地のヴァイオリン製作の歴史が次々と語られ、来場者たちはまるでタイムトラベルをしているような気分を味わったことだろう。

中でも筆者が心惹かれたのは、チェコと旧東ドイツの国境付近に位置する数々の小さな町のエピソードである。たとえば、現在のチェコに属するグラスリッツでは、古くから銀の交易が行われ、16世紀以降はヴァイオリン製作の町としても発展した。宗教改革後、町の宗教がカトリックに定められたために、ヴァイオリン製作に携わっていたプロテスタント・ルター派の人々は、12キロ離れたドイツのクリンゲンタールまで毎週礼拝に通っていたという。こうして、クリンゲンタールには近隣のカトリックの町からルター派の楽器製作者が集まり、町はヴァイオリンや管楽器製作の地として知られるようになった。あるいは、同じく旧東ドイツ地域のシェーンバッハという小さな村でもヴァイオリン製作が行われ、作られた楽器は近郊のマルクノイキルヒェンで売られていた。そのため、マルクノイキルヒェンではヴァイオリンの売買が盛んになり、ヴァイオリン商人が町で有数の豪邸に住んでいたという。これらの町や村は、現在はチェコとドイツの二つの国家にまたがる地域だが、今のような国境がなかった時代には、それぞれの町でヴァイオリンの製作と販売を分担し、協力しながらヴァイオリンづくりを行ってきたようだ。ちなみに、この地域からは、チェコのアマティやドイツのロートヴァイオリンなど、今なお続く楽器メーカーが数多く輩出されているとのことだ。

結び

今回の講座では、誰もが知っている楽器・ヴァイオリンがテーマでありながら、そのルーツと製作のふるさとという知られざる側面について、さまざまなエピソードを聞くことができた。そのどれもが、長年にわたって製作に携わってきた無量塔氏ならではのユニークな内容であり、お話を聞く機会を得られたことをたいへん幸運に思う。また、会場には無量塔氏がこれまでに作成・修繕

した古楽器が展示され、訪れた人々が直に触れることができた。講座の内容はもちろんのこと、普段あまり目にすることのない古楽器の数々と触れ合うという意味でも、とても貴重なひとときであった。



会場に展示されていた古楽器の数々。

左から、ディスカント・ヴィオラ、ヴィオラ・ダモーレ、リラ・ダ・ガンバ、リラ・ダ・ブラッチョ、ヴィオラ・ポンポーザ。



レクチャー終了後、来場者と語り合う無量塔氏（左）。

写真の楽器は、ヴィオラ・ポンポーザ。